

けに負っているわけではない。ただしこうした点の詳しい分析については、今は措く。

(13) ベルクソンのテクストには、同じ趣旨の反実仮想の文章が頻出する。ex. MM, 228-32.

(14) ベルクソンは二つのリズムを体験する例として睡眠中の夢を挙げている。すなわちその際、「睡眠」のリズムと「夢」の内部のリズムの両者が流れているというわけである(MM, 233)。しかし第一にこの例も人間的な経験の限界を出ない。第二に「睡眠」のほうのリズムは当人には経験されていないのではないか。

(15) 舞踏家の例においても、問題になっていたのは鑑賞者とその対象たる舞踏家との「共感」である。また『物質と記憶』における「象徴的な身構え」の例も同様で、それは「諸君の意識が諸君自身の遂行する運動のなかに把握する」運動性なのである(MM, 234)。われわれは、自らが「遂行する運動」の、あるいは「共感」それ自体の生成の仕方を問わなくてはならない。

(16) 以上に試みた「再構成」を確認するためには、理論的には進化の問題を、経験的には習慣形成の問題を問い直さなくてはならないだろう。いずれも身体が、あるいは生命体が新しいリズムを獲得する場面にわれわれを立ち会わせてくれるからである。

本体」あるいは「分割されざる連続 *continuité indivisée*」(MM, 203)が、「実在する本体の運動する連続 *continuité mouvante du réel*」(MM, 237)が「無媒介の直観」に「現出」する。この「連続」は「純粹持続」の宿している流れ去ることそのことの「連続」にほかならない(MM, 207)。「凝縮による具体的知覚」が生成したのである。「縮約」と「弛緩」は、この生成を支えるものとして、当の生成してきたものうちに見出される。流れ去ることそのことは「張り緊め」られるなかで「張り拡が」るのである。質の独自性は「記憶力」に起因する。しかし質が運動として存在することは物質の「流れ去ることそのこと」に起因する⁽⁶⁾。

註

- (1) ベルクソンからの引用参照箇所は略号を用いて以下の書物の頁数を本文の括弧内に記す。なお引用文中の傍点は原著のイタリックである。「」内は引用者による。
- MM: *Matière et mémoire*, PUF, 1968.
 ES: *L'énergie spirituelle*, PUF, 1990.
 DI: *Essai sur les données immédiates de la conscience*, PUF, 1976
 EC: *L'évolution créatrice*, PUF, 1976.
 PM: *La Pensée et le mouvant*, PUF, 1975.
- (2) “tension” から組み立てられている原語は、時間的概念と解される場合「張り」という語を入れて訳してみたい。
- (3) 運動性の水準に留まるかぎり「分割されざる」という規定は「分割不可能 *indivisible*」という意味に等しい。しかし形而上学的水準に移行するなら、あるいはまったく逆に空間の相に移行する

なら、極限においては「分割されざる」当のものも「分割可能 *divisible*」である(c.f. MM, 234, 209)。したがって「分割されざる」という表現は、こうした移行の可能性を背景に具えている。(4) さらに、人々の間でそれを利用する仕方が類似するかぎり、すなわち同様の身体習慣を身につけているかぎり、諸対象の「限定」の仕方とその意味は「社会的」でもある(MM, 203, 206)。(5) 一般に名詞が空間表現に適しているのは、こうした知覚対象の記号化と軌を一にする。知覚対象の記号的な性格と言語の記号的な性格は、有用性および習慣的行為という同じ根から発しているのである。

- (6) これに対してベルクソンは「第二の選択」を付け加えている。「記憶化したイマージュ *image-souvenir*」はいわば身体のフィリターによって選択され、その想起は現在の状況に利するものに限られる。この点は今は措く。
- (7) 「運動性」については、たとえば以下の拙論で少し触れた。「ベルクソンにおける身体習慣形成の可能性」、横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅱ、No. 3, 2000。
- (8) 『カンディンスキー著作集』1、西田秀穂訳、美術出版社、二〇〇〇年、九五―六、一〇五―二頁参照。なお、カンディンスキーの理論については、以下の拙論で少し扱った。「美的な体験と知覚」『崩壊の時代に』所収、同時代社、二〇〇二年。
- (9) 『カンディンスキー著作集』2、西田秀穂訳、美術出版社、二〇〇〇年、六一―五頁参照。
- (10) 同書、一二七―二七頁。
- (11) 同所。
- (12) したがって『空色』などが有している浮遊感⁽⁷⁾は垂直線の優位だ

り拡がるうとする傾向 *tendance extensive*」(MM, 208, 248)である。「物質」はその「傾向」として、「張り拡が」ろうとする。物質の「流れ去ることそのこと」は、「凝縮による具体的知覚」においては、「張り拡がり」という方向性となつて「現出」している。それが知覚の客体的側面を構成する。実際、「感覺質」は無数の「純粹知覚」を「縮約」することに起因するのであつた。なるほど一切の「記憶力」が排除されるなら、「張り緊め」を失つた運動性はただただ「弛緩」して「連続」をも喪失し、いわば諸瞬間に散り散りになるだろう。「流れ去ることそのこと」自体は、一切の「記憶力」を欠く以上、「純粹知覚」と同様に権利上の究極概念にはかならない。流れ去ることそのことは、単独で取り出されれば作動しえない。運動しない。しかし、「われわれの生ける持続」が「物質の流れ去ることそのこと」を利用して発生することは可能である。

したがつて記憶力と物質との交流について以下のように「再構成」することができるだろう。まず「流れ去ることそのこと」たる運動の場が、時間の場が存する。それは、それ自体としては作動しえない。次いでそこに「記憶力」が到来するなら、或る特定のリズムを具えた運動性が生成する。このとき「把握」の「行い」たる「知覚の行い」が遂行されている。「知覚の行いにおいて、何か知覚そのものを超えるもの」が「把握」される。「知覚することは不動化することを意味する」(MM, 233)。「物質と記憶」においてベルクソンが「知覚」という用語を使用する第二の意図である。知覚の側で為し得ることは、流れ去ることそのことを「純粹記憶力」において／よつて「縮約」することだけである。知覚において／よつて「流れ去ることそのこと」は引き止められる。それが物質のリズムで留められるなら、物質が生成する。われわれのリズムで留められるなら、「凝縮による具体的知覚」がわれ

われのものと成つて生成する。「記憶力」が「流れ去ることそのこと」に合一する。「多くの時間契機 *moments* を次々と繰り込んでゆく *prolonger* 記憶力の努力」が知覚の占める「或る一定の持続」を成り立たせる(MM, 301)。ただし事実上は、われわれが利用するのはすでに特定のリズムを具えている物質であり、当の物質の「流れ去ることそのこと」である。「私は一挙に物質的世界一般のなかに身を置く」(MM, 47)。ううして生命体が発生する。「張り拡がる連続のただなかに行為の中心」たるわれわれの身体を置くなら(MM, 261)、流れ去ることそのことは、生ける持続のリズムにおいて、身構への内面に留められる。身体の「待機の能力」は記憶力たる「内面の力」の「象徴」である。「記憶力」という主体性が、その精神性が、物質の「流れ去ることそのこと」に合一して、当のリズムを発生させる。一方で精神が身体に合一して、それを生ける身体と成す。身体が運動性を宿す。独自のリズムを有した身体が発生する。身体も「イマジユ」の一つである。「精神に対する関係」を持ちうる身体、「精神の生において」或る「役割」を果たすことができる身体である(MM, 200)。他方で流れ去ることそのことは、身体の身構えにおいて現在に留められ、それとともに、將に流れ来たらんとする時間契機に変容する。「持続の厚み」において先取りされている将来である。「われわれの純粹知覚 *notre perception pure*」とは、われわれのものと成つた「純粹知覚」であり、それはすでにもう「持続の厚み」を具えている(MM, 72)。このようにして「流れ去ることそのこと」は、時間的な(そこ)と成る。(ここ)に存する身構えにおいて先取りされている将来である。運動の場たる「流れ去ることそのこと」が「知覚の行い」を介して、時間的な将来たる(そこ)と成るわけである。この意味で、知覚が時間的な(そこ)を開く。知覚ははじめから外部性を指し示す。かくして「実在の

リズムには事実上、限界が存する。

しかし不可能性はそれに留まらない。原理上も不可能である。第二に問われるべき「矛盾」の所以である。仮にわれわれが物質のリズムに達したとしてみよう。その際今度は、それこそがわれわれのリズムと成ってしまう。われわれは当の持続を生きるわけである。客体性は失われる。逆に知覚の客体的側面が維持されているとしよう。それが客体的である印は、当の側面が主体的側面を超えることによって与えられるのであった。物質のリズムはわれわれのリズムと質を異にしていなければならぬ。したがって今度は右に述べたように、「把握」の「行い」が自らのリズムの手垢をつけてしまう。もうすでに、「われわれの意識によって生きられる持続は、或る特定のリズムを帯びた持続である」(MM, 230)。「即自的に en soi」(MM, 231, 233)に存する物質のそのリズムに触れることはできない。「私の知覚」は「私の持続」の独自のリズムのせいで「私に内面的」なのである(MM, 233)。いずれにせよ「矛盾」は、知覚が自らの内面に宿す「基体」への原理上の侵入の不可能性のゆえに生じている(cf. MM, 57-8, 63)。こう言い換えてもよいだろう。今の場合原理上、知覚の主体的側面は除去されない。そのかぎり、問題にされている「基体」は、知覚の内面に在っても、あくまでも「主体」に対する知覚対象の位置を占めるしかない。対象であるかぎり、運動は意識にとって存在する。しかるに「物質の流れ去ることそのこと」がそれとして意識に与えられることはありえない。今の場合、意識に与えられるのは、「無媒介に知覚される」運動性である。『時間と自由(意識に無媒介に与えられるものについての試論)』においても「純粹持続」は意識対象たることを免れていない。持続の「純粹」性は、空間図式からの解放を意味しており、この書物の眼目もその点に存している。しかし運動の本質が知覚対象として捉

えられているがゆえに、ゼノンの逆理とは逆の方向に図式化されてしまっている。運動性は意識の側に置き直されてしまうのである(cf. DI, 81, 86, MM, 227)。舞踏家の例として、鑑賞者が自らの運動性を舞踏家に移入しているにすぎない。「基体」に達することの原理上の不可能性は、知覚の主体的側面に端を発している。しかし当の「矛盾」は「実在する本体」となって「現出」してもいる。

問いの方向を逆転させてみよう。第四の問い。いかにして「矛盾」は「実在する本体」となるのか。あるいは同じことだが、知覚の二側面はいかにして「把握」されるか。この知覚の「背後の暗がり」に張り拡がる件の曲線の形態」の「再構成」を試みなければならぬ(MM, 206 et 250)。それはまた「内面の連続」を基に「生ける一性」の「発生」を、運動性の「発生」を辿ることでもある。物質も持続し、それ独自のリズムを具えているのであった。「物質」も、僅かであるにせよ「凝縮による具体的張り拡がり」として「持続」している(MM, 208, 234, 247, etc.)。物質は「無数の震動に溶解しても、当の震動すべては不断の連続において結びついている」(MM, 234)。してみると物質も「記憶力」を必要とする。知覚の二側面は物質に対しても指摘できる。物質もその「流れ去ることそのこと」と「純粹記憶力」との総合である。この「流れ」はすべての知覚が同じように具えている「流れ去る持続」(MM, 213)のその「流れ去ることそのこと」であり、「流れ去ることそのことたる運動 mouvement d'écoulement」(MM, 256)である。流れ去ること一般である。なるほど事実上は、われわれは物質の運動性を利用する。しかし物質自身も当の「流れ」を利用して成立している。したがってわれわれに「何か感覚以上のもの」の存在を教えているのは、特定の色合いを具えているかぎりでの物質ではなく、むしろその「流れ」そのものであるだろう。物質の「張

が、深みにおいては生き、振動している」のである(MM, 229)。感覚質の「内面 *interieur* の震動」、「内面の連続」である。運動性という「生ける一性は内面の連続から発生する」(MM, 204)。感覚質は内面の連続を「基体」とし、それを「記憶力」が「縮約」することによって成立する。換言すれば、内面の連続とは時間的な「張り拡がり」のことであり、それを「記憶力」がその「内面の力」をもって「張り緊め」ている。当の「基体」は主体の側が与えたものではない。主体性の能力を超えている。しかもこの「連続」の「内面性」のおかげで、従来の二元論の困難は解消される。物質と表象という「二つの世界」を架橋する必要はない。この「混合」体たる「無媒介の知覚」——「直観」に与えられる「凝縮による具体的知覚」——においては、物質と表象とは未だ分離されていないのだから(c.f. MM, 228)。感覚の「基体」は感覚「質、そのものうち」に在る(MM, 229-30)。われわれは知覚の二側面を分かち、感覚における「感覚の客体性」を「根拠」にわれわれから独立の物質界を立てるわけである。二側面を宿している知覚は、この両者に分かれる「途上」に存する。それは「運動するイメージ」にほかならない。またこの「基体」は運動性の時間的な「連続」を保っている。「多少とも等質的」であるにすぎない。内面の連続は、それが運動であるかぎり、いかに稀薄化されようと「質」を失うことはない。「分割可能性」という空間図式は排除されている。そうした稀薄化の極みが「物質」である(MM, 234)。物理学や機械論の扱う「物質」も、それ独自のリズムにおいて、その身構えにおいて「後続する時間契機において生じることの根拠」を含んでいる(MM, 229-30, 233-4, 216-7)。『物質と記憶』のベルクソンにとっては、「物質」も、それが運動する以上、持続する(MM, 234, 236)。物質も自らの持続を生きている。かくして知覚の客体的側面は、当の知覚が

「物質の流れ去ることそのこと」をその内面に宿しているかぎりにおいて、「物質の知覚」を表現している。すべての知覚はその内面においてすでにもう「物質の知覚」である。知覚ははじめから外部性を指し示しており、「物質」は知覚する主体の外部に存する(MM, 58, 246)。感覚質はその内面の運動において／として物質を、物質の「客体性」を具えているのである。光波の例は、そうした内面の運動の示す極限を説明せんがためにすぎない。

第二の問い。なにゆえ当の「根拠」は「経験的」ではなくて「理論的」なのか。なるほど知覚世界を運動性の層において捉えた上で、運動性を「理論的」に分析することはできる。しかし当の「基体」がそれとして「経験」に与えられることは不可能である。今の場合「把握 *saisir*」はすでにもう「行い *acte*」であって、「基体」は「見抜かれ *deviner*」にすぎない。「何かわれわれの感覚を超えるものをわれわれに把握させ見抜かせる行い」である。「基体」は「推測されるが知覚されない *souponné et inaperçu*」(MM, 229, c.f. 231-2)。「経験」に与えられている「無媒介の知覚」そのものはもうすでに「混合」体である。われわれは「基体」そのものに、その「深み」に達することができない。知覚の客体的側面そのものは「背後の暗がり」に張り拡がっているのである。こう言い換えてもよい。それぞれの生命体は独自のリズムを具えている(MM, 230-2)。「物質」も、それがある種の持続であるかぎり、それに独自の質を具えている。物質にはそれ独自の色合いが宿っている。物質のリズム(MM, 234, 236)はわれわれのリズムではない。上に引用したように、われわれが光波に達するのは、「仮に……いつそう緩やかなリズムでそれを生きたことがわれわれにできるとするなら」のことにすぎない。あくまでも反実仮想を前提とした上での話である。舞踏家のリズムに同調することはできても、人間的な

ら、垂直線は風船のように容易く額縁を乗り越えて行くことだろう。赤鉛筆の赤も記号たることを止め、鉛筆という事物をはみ出し、乗り越えて行く。もはや丸付けの道具ではない。赤は「凝固化」から解放され、鉛筆なる事物から溢れ出てしまう。感覚質はその真の運動性を回復する。「感覚質の連続」(MM, 235)である。それどころか鉛筆のほうも、尖った先をあちら側に向ければ、今にも机を超えて窓際まで飛んで行こうとする。ちようど額縁を乗り越えて行く垂直線のように。もはや鉛筆も記号たることを止め、空間中の「そこ」に「固定」されてはいない。赤も鉛筆も運動性を回復する。当の運動性の具えている持続の厚みのゆえに、赤や鉛筆は「事物」から溢れ出し、「それ」を乗り越え、事物の固定されていた「そこ」から解放される。運動性は、ゼノンとはまったく逆の方向に、事物を前提することなく事物たることそのことから解放される。

それだけではない。もう少しカンディンスキーから借りよう。たとえば額縁そのものもすでに絵画の基本的要素であって、運動性を宿している。画布もまた絵画にとって中性的な空間——「無定形で生氣のない慣性的空間」——ではない。たとえば額縁を構成している垂直線も上昇という運動の方向性を示している。さらに、画布の下部に置かれた水平線はいよいよ安定を増すのに対して、上部に描かれた水平線はむしろ重みを増す。画布の下部はすでに重力の淀みを、重みをもたせており、上部は軽やかさを醸しているからである。同様に、鉛筆の置かれていた机も運動性を回復する。もはや事物の下に広がる「固定」された空間など任りはしない。すべてが生彩を帯びてくる。「そこ」そのものも運動する。有用性による屈曲を被って「人間的な経験」に變貌する以前においては、知覚世界は運動性で充たされている。

四 形而上学的還元——精神と物質との交流の可能性

色を含んでいる光波の問題に戻ろう。なるほどベルクソンのこの説明を運動性の層において理解することはできない。運動性は一方で本来的に質を具えており、他方で「経験」に与えられるのだから。しかしその説明においてベルクソンが問題にしているのは、「われわれの知覚と絶対的に道交 *coincider* するというわけではない外的世界が存在すると信ずる際にわれわれの有する主要な理論的根拠 *raison théorique*」である。「理論的」根拠そのものは「経験」に与えられていない。しかし当の「根拠」は「われわれの無媒介の知覚が具えている混合から成る性格」であって、「実在する本体となつて矛盾の現出 *apparence de contradiction réalisée*」である(MM, 229)。「われわれの意識の或る状態」と「われわれから独立した或る実在の本体」とを「同時にわれわれは、自らの知覚において把握している」のである。運動性はさらに知覚の二側面——主体的側面と客体的側面——に還元される。四つの問いを立てつつ、この「矛盾」をいささかなりとも解きほぐしてみよう。

第一の問い。なにゆえ「外的世界」の「根拠」なのか。「われわれから独立した」ものが把握されているからである。「感覚の客体性 *objectivité*」である。「純粹持続」は心理学的還元を施されているという点では「純粹」だが、まだ形而上学的還元が為されていないがゆえに混合体である。「感覚はいわば蛹の内面で莫大な数の運動を遂行して」おり、その運動を「多少とも等質的な」自らの「基体」として成立する。当の「基体」は「感覚の与える以上」のものである(MM, 229)。「主体性」は「記憶力」によって定義されるからである(MM, 31, 74, 246)。「感覚は表層においては不動のまま静止している

を基本として「組織化」された全体において成立している。「常に終わりに差し掛かり、かつ何らかの新しい音が加わっていつもその全体において変容している音楽のフレーズ」のごとくである。それこそが「感覚質」なのである(DI, 78-9)。かくして運動の質はそれに「固有の様相を具えた総体」(DI, 95)のうちに見出される。それぞれの曲はそれを構成するすべての音の「全体」としてその曲独自の色合いを具えている。そこには計測を可能にするような共通の尺度はもはや存在しない。『物質と記憶』によれば、次に来たる運動のそうした「先駆形成のおかげで、部分は潜勢的に全体を含んで」おり、それは「メロディーの各音が次の音へと傾いだまま、自分が演奏されるのを見守っているようなものである」(MM, 102)。そのようにして「感覚」あるいは「知覚」に与えられる「実在する本体の運動」は「分割不可能な全体」を形成しているのであり、それが「運動するイマジュー」である。

では、いわば安定した感覚質たる色などについてはどうか。同様の運動性を指摘できるのだろうか。第四章において感覚質の運動を指摘する際のベルクソンの説明にはいささか理解し難い点が残る。その説明はおおむね以下のごとくである。知覚される「二つの色」の質的な相違は「緊密な持続に起因する」。その持続において、われわれにとつては一瞬にすぎない「間に、当の色が遂行している数百京の振動が縮約されている」。「仮にこの持続を引き伸ばすことが、いつそう緩やかになりズムでそれを生きることがわれわれにできるとするならば……当の色が色あせて継起する印象に伸び広がるのを見る」だろう(MM, 227-8)。その際、当の色は「木だ色づけられているとはいえず、しかしよいよ純粋な震動と見分けがつかなくなる」。帰するところ「赤い光は、一秒間に四〇〇京回の振動を遂行している」(MM, 230-1)というわけである。感覚質は計測可能な運動によって説明されている

ように見える。色の光波が問題なのだろうか。しかしながらわれわれは少し急ぎすぎたのかもしれない。以上のように説明されているのは、無媒介の「経験」に、「直観」に与えられる運動性ではない。われわれが今問題にしているのは感覚質そのものの運動性であって、感覚質がその内面の深みに宿している運動ではない。後者の運動は運動性の層ではなく、形而上学の水準に存するであろう。むしろわれわれは、ベルクソンの示唆を聴き取ろう。「諸事物の内面の歴史たる莫大な時期を逐次飛び越えるならば、ほぼ瞬間的も同然の光景が掴まれことになる」。この光景は「生彩に富んでおり、ますます際立ってくるその諸々の色は、基礎的な無数の反復と運動変化を縮約しているのである。ちょうど、一人の走者の継起する多くの姿勢が縮約されて唯一の象徴的な身構えと成るごとくである。この身構えがわれの目に知覚され、藝術によつて再生されるのであり、すべての人にとつても走る人間のイマジューとなる」(MM, 234)。今度は、色の運動性が「走者」の「身構え」に例えられている。「色」が「無数の運動変化」の「縮約」であるのは、走者の「身構え」が「多くの姿勢」の「縮約」であるのに等しい。舞踏家の「身構え」と同様である。

実際、赤鉛筆の赤を「鉛筆」という事物から、その記号から切り離し、「赤鉛筆」という記号を剥脱するならば、暖色系の赤は鉛筆をはみ出し始める。カンディンスキーが言うように、暖色は広がる傾向を有しており、円の内部に置かれた暖色は境界線たる円周を乗り越えようとする。と同時に鑑賞者に近づいてくる。ちょうど垂直線が上昇の運動を具えているように。たとえば『相互の調和』や『空色』における浮遊感^①は、垂直線が水平線に打ち勝つことから発生する。これらの絵画を仮に九〇度回転させて横向きに置くなら、むしろ水平線が優位となつて絵画は上昇力を失う。あるいはまた、水平線をすべて消去するな

簡単に触れておこう。たとえば、舞踏を鑑賞する際われわれが見ているのは、舞踏家——運動体——の単なる型姿ではない。舞踏家の運動性である。舞踏家の現在の身構えにおいては「将来来たらんとしている身構え *attitude* が先駆形成 *preformer*」されており、われわれは「運動が運動を準備している」のを見る。当の舞踏に固有の「リズム」のおかげで、舞踏家の「身構え」において将来の運動が先取りされている。「先駆形成」とは、こうした運動の先取りを意味する。鑑賞者は舞踏家のリズムに同調し、操り人形師よろしく自分でも舞踏のリズムを取る。「身体的共感 *sympathie physique*」である。この「共感」の下で「現在において将来が掴」まれているのである。運動の方向が変化する際も、将来の運動の「方向はそれに先立つ方向のうちに示される」(DI, 9-10)。運動性は将来へ向かう運動として、舞踏家の現在の身構えにおいて捉えられている。その意味で運動性は「持続の厚み *épaisseur de durée*」(MM, 274, 72, 73)を具えており、時間の相の下でこそ把握されるのである。運動性は「事物たることそのこと」から解放されている。運動体なき運動、事物なき運動である。その際、舞踏家においては、(そこ)とは身構えにおける将来にほかならない。時間的な(そこ)である。将来は、「事物」についてわれわれが思い描くのと違つて、舞踏家が次に占める空間上の位置に存するわけではない。それではまるで将来が別の場所に今存在しているがごとくである。『物質と記憶』の言葉を用いるならこう表現してもよい。「運動することそのこと自体が縮約して質になる」。ゆえにこの運動と質と間に「事物」たることの「固本性を介在」させなければ、運動の質を回復する(MM, 228)と。過去についても同様のことが指摘できる。

しかしその前に身体と心理学的還元との関係について少し触れておかななくてはならない。というのも、行為に利する有用性が却下されて

いるのだから。われわれは行為と運動性とを区別する必要がある。なるほど、実践的な知とはわれわれが常日ごろ生きて生活してゆく際のその「実践的な生 *vie pratique*」に応じた認識である。実践的な身体も還元される。しかし身体を全面的に放擲すれば、同時に生きることもそのことも否定されてしまう。ベルクソン自身がこう述べてもいるのである。記憶力たる精神は「諸行為を通じて顕現し、物質を利用するのであつて、精神が身体と結合するということの存在理由は諸行為にある」(MM, 248, cf. MM, 256-7)と。「外的知覚の基層をなす条件 *conditions fondamentales*」を取り除こうなどという企ては、ベルクソンにとつても御伽噺なのである(MM, 208)。却下されるべきは「身体的に生きることの或る一定の必要 *certaines nécessités de la vie corporelle*」(MM, 205)である。実践的に生きることが全面的に却下されるわけではない。心理学的還元とは、あくまでも実践の基層を露呈させる作業にほかならない。「思弁」とは、「実践」の否定ではなくて、その基層を意味する。身構えにおける運動性はそうした基層に存する。行為連関の連関性は、運動の展開可能性を基層に有する。それは身構えにおける将来への展開可能性にほかならない。

運動性の問題に戻ろう。過去についても「身構え」についてと同様のことが指摘できる。たとえば、時計の振り子の規則的な運動には、われわれを眠りに誘う効力がある。そうした効力を産むのは最初の運動でも最後の運動でもなく、また、記憶に溜め込まれて併置されたすべての運動でもない。それではまるで、音楽の最後にそれまでの音すべてが一斉に響くがごとくである。そもそも併置されているかぎり、同じ振り子の運動は同じ効力しか産まない。当の効力は諸運動の「総体の成すリズムの有機的な組織化による」のである。量的運動ではなくて、運動の質である。質を具えた運動性は、このように「リズム」

免れる。われわれは「凝縮による具体的知覚」において、「直観」に与えられる運動性を、「実在する本体の運動」(MM, 227)を見出さなければならぬ。

三 知覚対象の運動性——運動の質と質の運動

ベルクソンが「知覚 *perception*」という用語を使用する第一の意図は、以下のように考えられる。すなわち、運動と感覚質とを時間の相に置き戻すことによつて、両者を同じ「凝縮による具体的知覚」の下に包摂し、そこに運動の質と質の運動とを見出そうとする。一方で従来は「量」的と規定されていた運動に「質」を回復し、他方で従来は「拡がり」の否定されていた感覚質に時間的な運動の「張り拡がり」を認める。運動と感覚とを質を具えた運動性という一つの類のうちに統合するのである(MM, 226-9, 230, 219)。

第四章においてゼノンの逆理を批判するベルクソンの意図もここに存する。逆理が発生し運動が否定されるのは運動を量的に捉えるがゆえであり、運動を量的に捉えるのは空間図式を前提とするからである。空間上の諸点を無際限に分割し、運動をその諸点に対応させているのである。事物の運動は、そうした空間における〈そこ〉から他の〈そこ〉への移動とみなされる。しかるに、そもそも運動体の通過する空間内の〈そこ〉は「固定」され、諸点は「停止している *s'arrêter*」わけだから、運動を不動性によつて構成せざるをえない。時間上の「進行 *trajet*」に代えて空間上の「軌跡 *trajectoire*」を置くなら、運動が否定されるのは当然の理である。運動を空間上の関係として再構成することはできない。帰するところゼノンの逆理は有用性に端を発しており、それを前提としているのである(MM, 209-14)。逆に、空間図式が人為的な構築物であるかぎり、基層に存する時間の相に

おいては、運動は否定されたわけではない。少しだけ考察を加えよう。「運動 *mouvement*」は「運動体 *le mobile*」——運動する「事物」——と「運動性 *mobilité*」——「運動することそのこと自体 *le mouvement même*」たる「運動の本質」——とから成る(MM, 209, 213, 216, 219, 228, 234, DI, 83-4, etc.)。運動を「軌跡」に対応させることは、運動性を運動体から引き離して空間上に置き直すことを意味する。運動の本質は運動体から放擲され、その通過する諸点に読み替えられる。運動性を抽象し空間図式に適合させているのである。運動が「等質空間」の規定——「等質的」で「分割可能」にして「数多性」を具えた「計測可能」な、そして「不動」の運動(MM, 211, 215-6, 227, etc.)——を受け取るのはそのゆえにすぎない。運動体から放擲された運動性は「空間の関数」となる。それは空間上の位置において計測される時間に変貌する。まず事物が存在していて、それが運動するということわけである。事物を前提としつつも、運動性は事物にとつて偶然的なもの——「遇性 *accident*」(MM, 228)——に格下げされる。それは事物にとつて外在的なものにすぎない。

ベルクソンの提唱する運動——「無媒介に知覚される運動」(MM, 215)——は逆に質を具えている。運動性は常にすでに質的運動である。質を欠いた運動はありえない。『物質と記憶』第四章において「直観」を提唱する際ベルクソンは、還元という「方途」は『時間と自由』でも適用したと記している。「純粹持続」——空間図式という混入物を排した「持続」——は質を具えた運動であり、「運動性」を意味する(MM, 203, 206-8, DI, 83, etc.)。それは質的な時間である。そもそも量的な規定から解放されて質を取り戻すなら、持続は質的な内容をもえていなければならない。それが運動性である以上、運動性も質的な内容を具えている。この学位論文をも参照しつつ「運動性」について

対象にいわば普遍的な意味を付与しているのである。眼前に置かれた鉛筆がまさに鉛筆に見え、他のものに見えないのは、習慣の拘束性のせいにすぎない。「鉛筆」という語の場合と同様に、知覚される鉛筆は記号化されてしまっている(MM, 209, cf. 204, 213, 226, etc.)。感覚質についても同様のことが指摘できる。赤鉛筆はたとえば丸付けという行為を指示している。鉛筆の赤も記号化されている。われわれは独立な対象において、感覚質をも空間内の独立した意味として「凝固化 solidifier」させているのである。「われわれの現勢的であれば瞬間的な知覚 *perception actuelle et …… instantanée* が物質に分割を施して独立な対象にすると同時に、われわれの記憶力は諸事物の連続する流れを凝固化して感覚質にする」(MM, 236)。われわれは、独立な事物を発生せしめると同時に、感覚質を事物の内に閉じ込めて当の意味に変貌させる。「われわれがそこに「行為の」支点を確保するために実在する本体の運動する連続に被らせる分割と凝固化という二つの作業は……物質に対するわれわれの行為の図式である」(MM, 237)。日常の知覚に現れているそうした対象は、「それに対するわれわれの可能的行為の停止する地点で、したがって、当の対象がわれわれの欲求による必要の利害関心を引くことを止める地点で区切られている」(MM, 235)。知覚世界は行為に対応する部分だけに「縮減 *diminution*」(MM, 32, 33, 34, etc.)される。「無媒介の知覚」がそうした「選択」(MM, 199-200)を被ることで、感覚質を具えた相互に独立した諸々の事物が現出する。

第二に、眼前のそこに在る諸事物は、それぞれの位置と相互の位置関係を保っている。われわれの日常の行為においては、たとえば消しゴムは鉛筆の後で用いられる。右利きの者にとって、消しゴムが右側に在って鉛筆が左側に在れば、両者の位置関係はその使用に適さない。

それぞれの事物の有用な位置は、身体習慣に従って為されうる行為に関連に応じて決定される。諸事物が保っている空間内の位置関係は、習慣的な行為連関の反映である。廊下で足元に見出される鉛筆は「落し物」となる。さらに、私が立ち上がった後も、机の上の鉛筆や消しゴムは位置を変えない。鉛筆が落下するわけではない。両者の位置関係も変わらない。われわれは事物の存立する「座を、まさしくわれわれがそれに触れうる地点に固定する」。そうすることが「われわれにとって有用」なのである(MM, 224)。諸事物の位置は空間内に「固定」される。しかるにそのためには、諸事物の存立している場所たる〈そこ〉(MM, 210)。もし場所そのものが動けば、われわれは当の事物に対する「手掛かり」を失って、まるで赤子のように、鉛筆の位置を、またそれと消しゴムとの位置関係をその都度手探りして決定しなければならぬだろう。われわれにとっては「安定したもの」(MM, 228)が有用なのである。日常の知覚空間は、「固定」され「併置 *juxtaposition*」された「相互に外在的」な諸々の〈そこ〉から成る(MM, 210, 231)。そして「凝固化」された感覚質を具え、「限定化」されて「独立」のもので成った諸々の「事物」が、「固定化」された諸々の〈そこ〉に存立する。

では「限定化」と「固定化」を被る「諸々のイマージュ」とは何か。答え——「運動するイマージュ *image mouvante*」(MM, 211)である。行為に資するべくわれわれは、「運動するイマージュ」を「凝固化」し「限定化」し、「固定化」しているのである。逆に「運動するイマージュ」は質を具えた運動を、あるいは運動を具えた質を意味する。それは本来的に質を具えた「運動性」にはかならない。時間の相において、運動は「事物」という規定を逃れ、同時に感覚質は「凝固化」を

連れ戻すことでもある。哲学は、抽象し図式化することから解放され、無媒介の層における「経験」へと導かれる。「実践的意識」(MM, 103, 132)あるいは「悟性 *entendement*」(MM, 201, EC, VIII)に与えられる物質に替えて、「思弁」における「無媒介の知覚」(MM, 229)が見出される。ただしまだ十分ではない。さらに第二の還元が要請されてもいる。有用性を脱却して無媒介なものへ帰還し、「無媒介なものから有用なものへの移行」を辿った後、さらに「残っているのは、このようにしてわれわれの垣間見る、実在する本体の曲線を形成する無限に微かな要素をもって、その背後の暗がりに「張り」拡がる件の曲線の形態を再構成することである」(MM, 206)。「無媒介なもの」はさらに「張り拡がり」と「張り緊め」という二つの「要素」に還元され、この「要素」をもって「再構成」されることになる。このようにしてベルクソンは、思弁によって物質と精神の本質を見極め、自らの「記憶力の魂論 *psychologie de la mémoire*」と「物質の形而上学 *métaphysique de la matière*」(MM, 248)を打ち立てようと企てるわけである。

では有用性に従って成立している日常の知覚世界とはいかなる世界であり、「無媒介の経験」を変貌せしめる媒介として何が却下されるのか。心理学的還元によって剥脱されるのは何か。答えは第四章の標題に与えられている。「諸々のイマジユの限定化と固定化 *la délimitation et la fixation des images*」である。実際、常日ごろ経験される世界においては、様々な物体が空間中に配置されおり、われわれはそれを利用しつつ生き生活している。そうした日常の知覚世界においては、第一に諸物体はそれとして「限定」されており、それぞれに意味を具えた相互に「独立な諸対象 *objets indépendents*」——「諸事物 *choses*」——として現れる。第二に、諸事物は空間中に「固定」された「諸関係」を有する。そしてこの二点は身体的な「可能的行為 *action possible*」の反映である。

第一に、たとえば鉛筆はわれわれがそれを利用して文字を書く際のその行為にうまく適合する。ちょうど雌ネジに対する雄ネジのように、鉛筆はそれを握るわれわれの手の型にうまく嵌り込む。鉛筆は（それ）と呼びうるような「独立性」を獲得する。鉛筆の「独立性」はこうした手の型を、われわれに為し能う行為を反映しているのである。日常の知覚対象は「可能的行為の反映」である(MM, 16, 17, 20-1)。習慣を具えたわれわれの身体は「それを利用する術を体得 *savoir sen servir*」(MM, 101, ES, 168)しており、当の対象をわれわれの為し能う行為に対応させて知覚しているのである。知覚対象を独立のものとすることによって、われわれの行為に「手掛かり *prise*」が与えられる。有用性に応じてわれわれのほうが物質世界に切れ目を入れて「分割 *division*」(MM, 228, 235, 236)し「限定」しているわけである。そうやってわれわれは、独立した諸事物を仕立て上げる。(それ)の「事物たることそのこと」がこのようにして成立する。それだけではない。私の握る手の型はどの鉛筆に対しても同様である。どれも同じ仕方で扱うことができる。それを利用する身体にとってはそれぞれの鉛筆の間に違いはない。諸々の鉛筆は、その利用の仕方に応じて常に互いに類似している。身体が具えている「〜できる」という行為能力に応じて、われわれはそれを鉛筆「として」再認する。常日ごろ知覚される鉛筆は、時と場所に関わりなくわれわれの為す可き行為を指示している。「〜できる」の「〜」という身体の為し能う内容に応じて、鉛筆の意味が知覚されているのである。知覚される鉛筆はそれに対するわれわれの対処の仕方を意味している。鉛筆とは、文字を書くためにしかじかの仕方では握られる可きものである。このようにしてわれわれの側が

って空間図式が成立する(MMM, 208-9, 215, 227, 232, 235-6, etc.)。たとえば眼前のそこに置かれている鉛筆は消しゴムの隣に存する。両者はそれぞれの位置を占めている。さらに、鉛筆をその場所から取り去ってそこに消しゴムを置いて、それぞれの場所そのものは動かない。こうして鉛筆や消しゴムの「下に拡がる *sous tendu*」不動の空間が要請される(MMM, 208, 211, 213, 246, 248, 276, etc.)。「無定形で生気のない慣性的空間 *l'espace amorphe et inerte*」(MMM, 208)である。これを単独で抽出すれば、無限に「分割可能」な「等質空間」という空間図式が得られる(MMM, 211, 215, 227, 232, 235-7, 247, etc.)。素朴実在説にせよカントの実在説にせよ、その説が前提している「等質空間」とは、日常的な空間を図式化した抽象物なのである。それは、諸事物が「場所を占めに到来する」際のその必要条件たる「媒質 *milieu*」とみなされている(MMM, 260)。ところで、日常の空間を物質の下に拡げるのは、「物質をわれわれの〔行為の〕手掛かりの下に置くため」(MMM, 246)である。したがって空間図式は「われわれの身体の機能から、つまりわれわれの低次の欲求による必要 *besoin* から精神が受け継いだ偶然的な形式」にはかならない(MMM, 205)。「本体の実在」に加えられた「偶然的な形式」である。空間図式は「われわれの行為にのみ関わ」って発生したのである(MMM, 260)。従来の二元論がこうした人為的な図式に立脚している以上、それによって惹起される身心関係の困難は偽問題である。

それゆえ逆に、当の図式をもたらす日常の知覚世界から脱却するならば、同時に身心関係の問題は真正の問題となる。その脱却のために「無媒介の直観 *intuition immédiate*」(MMM, 203)への帰還をベルクソンは提唱する。われわれが心理学的還元と呼んだ方途である。ベルクソンによれば、「事実」と通常呼び称されている事態においてはすでに、

「実在する本体 *le réel* は、実践上の利害関心 *intérêts de la pratique* に適合」すべく変形されている(MMM, 203)。「直観」において与えられる真なる無媒介の「経験」は有用性という媒介によって屈曲を被り、われわれが常日ごろ出会っている「人間的な経験 *expérience humaine*」に変貌する(MMM, 205-6)。身体的な行為 *action* に資するべく変貌されているのである。日常の知覚世界とは、生きて生活してゆく際の有用性のために、「行為を容易に」するために「実在する本体」が変容を被った結果である(MMM, 204)。したがって、この知覚世界から脱却して無媒介の層に到達するためには、「実践上の諸々の利害関心」ないし身体的な「欲求による必要」といった有用性を否定し剥脱する必要がある(MMM, 203-5)。ベルクソンの提唱する「方途」の要点は「日常の有用な認識の観点と真の認識の観点とを区別することに存する」(MMM, 207)。「欲求による必要の作り出したものを壊し脱するならば」、変貌以前に立ち返るなら、「われわれは、原初の純粋性を具えた姿で直観を回復し、実在する本体との〔無媒介の〕接触 *contact avec le réel* を取り戻すことにならう」(MMM, 205, cf. 204)。かくして「有用なもの *l'utile*」を排して「無媒介なものへ帰還する」と *retour à l'immédiat*」(MMM, 208, cf. 206)——還元——が要請される。「実践的 *pratique*」な知の「思弁的 *spéculatif*」な知への、「無媒介」の知への還元である。こう言い換えてもよい。われわれの認識は「精神の獲得された表層の習慣」——有用性という媒介によって変形された実践的な知——において変貌されてはいても、「われわれの精神の基層にある構造 *structure fondamentale*」——真なる純粋な「無媒介の認識」——においてはそうではない(MMM, 205, 207, 208)。心理学的還元とは、われわれの「経験」の水準をその無媒介の基層へと掘り進めることであり、同時に哲学的な考え方を当の基層の「経験」の水準に

て二項対立における両項を調停すること。これがベルクソンの日論見である。

ただし第二の二項対立に関してベルクソンは、一方で「純粹量」を認めず、「量」をあくまでも「稀薄な異質性」と規定する。いわゆる「等質的運動変化 *changement*」も、「具体的知覚」においては「稀薄な」異質性を有する。仮にそれを極限にまで稀薄化して、質が一切排除された数学的な「純粹量」とみなせば、それは「無」に帰する。そもそも「量」という概念は、計測可能性を、したがって空間図式を前提としているのである。他方で「具体的知覚」における「感覺質」のその「張り拡がり」を一貫して主張する(MM, 45-52, 226-35)。してみるとベルクソンが提起しているのは、従来の二元論における二組の対立をそのまま時間の相において継承しようなどという解決策ではない。概念図式としては「純粹知覚」と「純粹記憶力」とが両極に据えられるにせよ、「純粹量」に対応する時間概念は存在せず、感覺質は「張り拡がり」を有する。ところで「感覺質の異質性は、われわれの記憶力において無数の『純粹知覚』を縮約 *contraction* することに」起因する(MM, 203)。時間の相においては、「縮約」とは「純粹記憶力」の「張り緊め」る働きにはかならない(MM, 31, 39, 74, 233, 248, etc.)。そして「精神」は「記憶力」によって規定される(MM, 200, 246, 248-50)。反対に「客体的な変化の相対的な等質性は無数の『純粹知覚』が自然本性的に弛緩することに起因する」(MM, 203)。われわれに与えられる「具体的知覚」とは「もうすでに記憶力による、継起する無数の『純粹知覚』の総合である」(MM, 203)。「具体的知覚 *perception concrète*」は「凝縮によって *concret*」成立しているのである。すでにもう「凝縮による具体的知覚 *perception concrète*」である。純粹知覚は純粹記憶力によって縮約を被り、張り緊められることによ

て「感覺質の連続 *continuité des qualités sensibles*」たる「凝縮による具体的張り拡がり *étendue concrète*」(MM, 235)となっている。逆に「弛緩」が指し示しているのは、「凝縮による具体的知覚」における「張り拡がり」の方向である。かくして身心関係の困難に対してベルクソンの提起する解決策を以下のように推察することができる。なほ「純粹知覚」と「純粹記憶力」、「張り拡がり」と「張り緊め」との間に対立はあるが、二組の二項対立は得られず、むしろ二項関係が得られる。ベルクソンは従来の二元論の二組の二項対立に替えて、二項関係を提起しているのである。「純粹記憶力」と「純粹知覚」とを理念的な極限概念とし、この両項のいわば交点に「凝縮による具体的知覚」が位置する。両項はそうした「知覚」に収斂する。したがって逆に、「異質性」と「等質性」は、当の「知覚」のなかで働いている。「縮約」と「弛緩」として、すなわち「張り緊め」る方向と「張り拡がり」る方向として見出されるだろう。その意味で、「一方では純粹知覚の、他方では純粹記憶力の理論が……非「張り」拡がり」と「張り」拡がりとの、質と量との接近への途を準備する」(MM, 202)。かくしてベルクソンは「凝縮による具体的知覚」のうちに「縮約」と「弛緩」という時間的の相を見出そうと試みるわけである。それを見出すためにまず必要となる「方途」が、「直観 *intuition*」という「無媒介の認識 *connaissance immédiate*」(MM, 208, 209)への還元、時間の相への心理学的還元である。

二 心理学的還元——直観という無媒介の認識

なにゆえ時間の相へ、なのか。「本体の実在 *réalité*」がそこに在るからである。われわれが常日ごろ接している知覚世界は、「本体の実在」の変貌した姿である。さらにそれを人為的に抽象化することによ

能性を少し探ってみたい。心身関係を扱うための視座を確保するとともに、ベルクソンが第四章冒頭において、この書物の副題——「身体と精神に対する関係 *La relation du corps à l'esprit*」——と反対方向の問題を提出した意図も推定できるであろう。

一 従来の二元論の困難とベルクソンの提起する解決策

従来の二元論をベルクソンに従って簡単に整理し、心身関係を解決不可能にしている所以を瞥見しておこう。従来の二元論において対立するのは第一に「拡がり *étendue* と非拡がり」ないし「延長 *extension* と非延長」であり、第二に「等質的な量 *quantité homogène* と異質的な質 *qualité hétérogène*」である。いわゆる心身二元論においては、心と身体との関係がこの二組の二項対立に基づいて考察される。すなわちこの二組の対立は平行しており、等質的な延長という前項の規定には、「本質的に分割可能な数多性 *multiplicité divisible*」を具えた物質ないし物体・身体 *corps* が、さらには計測・計算可能な等質的運動・変化が組み入れられる。異質的な非延長という後項の規定に組み入れられるのは、一性を具えた精神、魂（「心」ないし意識、さらには異質的な質からなる知覚や感覚である。身体は延長する量的な物質の一種であり、心は質的であって延長しない（MM, 201, 227）。したがって心身を関係づけるには、対立する二項を架橋するなり、一方の項から他方の項を導出するなりしななければならない。しかるにそもそも互いに否定し合う通約不可能な二項を立てた以上、それは成功の望みのない企てとなる（MM, 201, 230）。たとえばもし精神が身体を介して物体から運動たる刺戟を受け、それを感覚質 *qualité sensible* に翻訳して物体にいわば投げ返すと想定するなら、不可能な架橋が二度なされなければならない。第一にそうした翻訳は両項の何らかの接触

を必要とする。第二に投げ返された感覚質が物体ないし運動に重なる必要がある。もし重ならなければ、感覚質はわれわれの表象の世界に閉じ込められてしまう。いずれも不可能である以上、対立する両項はそれぞれ「二つの別個の世界」を形成することになる（MM, 227, 46）。急いで付け加えるなら、ベルクソン独自の規定をもつ「イマージュ *image*」は、物質的なものと精神的なものがこの「二つの世界」に、物体たる事物と精神的な表象とに分かれ行く「途上 *mi-chemin*」に位置づけられる」（MM, 1, 3）。

ベルクソンによれば、上述の二項対立は空間図式に立脚している。これに対して『物質と記憶』という著作全体を覆う基本構想は、「空間の関数ではなくて、時間の関数」において考察を進める点にある（MM, 74, cf. 248, 249）。ベルクソンの提唱する第一の概念たる「張り *extension*」ないし「張り拡がり *étendue*」は時間的な概念である。この第一の概念を「分割されざる *indivisé*」（MM, 47, 248, cf. 202, 261, etc.）と形容することができるともそのゆえである。「物質的な張り拡がり *étendue matérielle*」（MM, 202）とは「物質の流れ去ることそのこと」にほかならない。この時間的な第一の概念において第一の二項対立たる「（張り）拡がり」と非「（張り）拡がり」とのありうべき接近を垣間見ようというわけである（MM, 202）。そのためにベルクソン独自の極限概念たる「純粹知覚」——記憶力を一切排除することによって物質から得られる知覚の瞬間的な相貌（MM, 31, cf. 200, 250, 259, 274, etc.）——が用いられることになる。第二の概念は「張り緊め *tension*」である。これも時間的な概念であり（MM, 280）、「量と質との「間隙を……張り、緊めを考察することによって縮減」しようというわけである（MM, 203）。「純粹記憶力」の概念がこちらの対立を解消する。従来の二元論を時間の相の下に置き直し、そうやっ

ベルクソン『物質と記憶』第四章における二重の還元
— 知覚の運動性と物質 —

宮崎 隆

La double réduction dans le quatrième chapitre de *Matière et Mémoire*.
La relation bergsonienne entre la perception concrète et la matière

『物質と記憶』第四章（以下、場合によっては「第四章」と略記）の冒頭でベルクソンが提出するのは、「魂の身体に対する合一 *l'union de l'âme au corps* の問題」である(MM, 200)。しかるに第四章においては、身体そのものについての分析はほとんど見出されず、知覚ならびに運動についての、あるいはこの書物の表題たる「物質と記憶 *matière et mémoire*」についての記述が大半を占めている。なにゆえか。この問いに対する答えを得るには知覚と身体との関係を解明する必要がある。小論は、その関係解明の準備として、二重の還元を抽出する試みである。第一の還元によって有用性からの脱却が目差される。これを仮に「心理学的還元」と呼ぶなら、心理学的還元をとおしてわれわれは運動性 *mobile* という基層の水準に連れ戻される。知覚世界は運動性の層において捉え直される。しかしその層はまだ本

源ではない。運動性はさらに第二の還元を施されて「物質の流れ去ることそのこと *l'écoulement de la matière*」(MM, 237)と「記憶力 *mémoire*」の「内面の力 *force intérieure*」(MM, 249-50)とに還元される。こちらを「形而上学的還元」と呼ぶなら、形而上学的還元をとおしてわれわれは知覚世界の本源の層に至る。この本源において記憶力と物質とが交流する。しかるに当の交流の現場を知覚世界において把握することは原理上、不可能である。知覚世界は交流の結果にすぎない。両者の交流は運動性が生成してくる際のその現場において問われることになるであろう。

小論ではまず、身心関係の問題に困難のもたらされる所以たる従来の二元論をベルクソンに従って概観し、彼の提起する解決策を確認する。次いで二重の還元を抽出する。最後に物質と記憶力との交流の可

MIYAZAKI Takashi